碑銘幻想

望月海淑

①

静谷正雄先生が出版せられたものにインド仏教碑銘目録がある。インド、パキスタン等において発見せられている碑文を集めたものであるが、同時に、これはSten KonowやLüdersの目録等々との校証もなされており、大変に便利なものということが出来る。

何故ならば、仏教において非常に数多くの経典がのこされているのであるが、それらの中でお釈迦さまが、自ら筆をとって書かれたものは一つもないとされ仏弟子たちの記憶になる言葉を集めたもの、更に後世の人々が、仏教思想の展開の上において述作されたもの等が経典とされているからである。それは常に如是我聞と語り出される経典の冒頭の言葉のように、いつも釈尊が人々にある時に語ったという型をもっているので、史実的には果して何時頃のことであるのか、インドのどの辺の地においてのことであるのか、というような実証的なことが解明し得られないことを意味している。

例えば法華経にしても、序品第一には、如是我聞一時仏住王舎城耆闍崛山中……と説かれている。一時とはSamayaであり、実際の時間を示すKālaとは異り、全く「ある時」という時間を想定するものであることは、里見泰

穏教授の御指摘[1]の通りであるから、果して史実的に何時のことであるかは、全く明白にはせられておらない。にもかかわらず王舎城といったことは、釈尊が王舎城で最も長期に亘って教えを説かれたという伝統を踏まえてのことであったと想像せられる。

事実、大乗非仏説論が唱えられたことは、徳川時代に遡ることが出来るし、近代の研究においても、法華経等の大乗仏教の成立は、紀元一世紀頃とさえいわれている。

それならば、大乗仏教は、少くとも法華経は何年頃、どの辺で作製せられたものであるか、というような点については、現在のところ全く推測の域を出ないでいるという他はあるまい。そして、それらの解明の鍵を握るものとして経典中にあらわれる具体的事物とインドの古代の社会のあり方等の関係との追求がクローズアップされて来ているということが出来よう。

例えば、インドに現存している種々な石造彫刻の流れの中において、最も古い時代においては釈尊の姿を彫することをさけ、菩提樹や獅子座や足跡で釈尊を象徴的に示そうとし、ギリシャ文明との交渉の後において仏像の彫刻が出現して来たとせられているが、このような観点に立つ時、方便品の中の、童子がたわむれに砂の上に仏の像を描いて[2]も、というような話が、法華経成立の年代を推測する一つの手がかりとして意味合いをもって登場をして来る、といった具合であろう。

今、静谷先生の碑銘目録が便利なものといったのも、このような意味合いにおいてであった。

そして今、私が参考にしたものは、この碑銘目録のうち、グプタ時代以前の仏教碑銘目録であったことを、前もって了解をとっておきたい。

②

仏教碑銘目録は、インドに数多く残されている仏教関係の事物の中から、碑銘のあきらかなものを、地域別に解読し配列したものであるが、グプタ以前の目録にしても、それは一八〇四銘という数を数えることが出来る。そしてこれらの碑銘には、誰が何のために、何を奉献したのか、というようなことが記されているので、これらを整理することによって、インドのどの地方において、どのような仏教活動がなされていたのか、或はどの地方にはどのような流派が盛んであったのか等について、ある程度の推論を立てることが出来るのではなかろうか、と思われる。

今、大乗仏教はどのような地点で、その動きを示しだしたものであるのか、一つの仮説のもとに考究をはじめようとするのであるが、それは大乗仏教の母胎であるといわれる大衆部に関する記述がある地点に、大乗の動きがあったのではないか、ということであった。

しかし、一八〇四種にのぼるこれら碑銘の中で、大衆部のために、というような具合で、大衆部に言及されているものは、僅に十一種にすぎなかった。もちろん残されている石造物には菩薩像などの数が非常に多いのであるから、大衆部に関するものが全体の千分の一に充たないというはずはないであろうし、わざわざ大衆部のために、というようなことに言及する必要もない程のこととして省略されたものも沢山にあっただろうし、破損等のために解読され得ないというようなものも沢山にあるであろう。しかし、それらのことについては、今、実際に一つづつの石造物にあたってみることが出来ないことであるから、これからの論究の外におかざるを得ないであろう。したがってこれからの道は、極めて不完全な仮説の上になり立っていることを御了承願っておきたい。

③

大衆部に言及された十一種の碑銘の出土地は、Kārliが二ケ、Kosamが一ケ、Mathurāが七ケ、Wardakが一ケとなっている。

KārliまたはKarlaとよばれるこの地は、ボンベイから南西の方角、プーナへ行く途中にある。赤色をして無限の彼方にひろがるかと思えるデカン高原の中には、アクセントのように河川が流れるが、このような河川にそって、しかも交通のさほどに不便ならざるところは、仏教教団にとっても便なるところなのであろう。海岸からKārliまでは、さほどの距離はない。この地形的なものは、仏教の発達上においても、一つの示唆を含んでいるように思われる。

インドの雨季には短時間にすさまじい豪雨に襲われて河川が氾濫し、現在でも交通が遮断されて回復に数日を要することが少なくない。そこで修道僧たちが遍歴の足をうばわれる雨季の間、一カ所に滞留して集団生活を営む習慣が古くから生れていた。③というインドにおいて、赤土の間に背の低い灌木が点在するデカン高原では、より一層にこの感は深いが、このデカン高原の間をえぐって河川が流れているあたりの断崖は、仏教徒にとって、恒久的な寺院建築の場として、あるいは絶好的であったかもしれない。

しかし、それが絶好な場であるとしても、堅い断崖を堀りぬくには大変な労働力と時間と金銭がなければならないであろう。そしてこの金銭が必要であるという点で、海に近いという立地条件は大きな鍵であったのではなかろうかと思われる。

仏典の中には外国との通商を思わせるものを多々伺い知ることが出来るが、現在でもこの近くにあるボンベイがインドの西の玄関であるといわれているように、西方にむいて開いている海は、早くから他国との貿易交流に便であっ

たのではなかろうか。

現在、知られているインドの石窟寺院は一二〇〇以上の多くを数え、その中の七十五パーセントは仏教寺院であるというが、更にこの石窟寺院の大半は西方インドと呼ばれる地方に点在している。これは気象条件の差もあったことであろうが、ただそれだけのものでもなかったことであろう。

ここでとりあげているKārli窟院は、第一期のチャイティヤ窟の発展の頂点に達したものであり、単にこの種の形式の石窟で最大をほこるのみならず、均整極めて美しい堂々たる見事な出来栄えで、古代インドにおける石窟開堀の技法が如何に進歩していたかを示すものである、④とさえいわれている。

Karli窟院は、正面入口の後壁に明りとりをかねた大きなチャイティヤがあり、入口からは半円型に堀りぬかれた洞窟がひろがり、八角形の石の柱が三十八基、十六角形の石柱が一基、騎象の男女の姿を彫り出されて建てられており、一番奥にはスッーパーが建立せられている。

僧たちは一定の時間に、経を誦しながら、このスッーパーの周りをめぐって、仏陀に対する供養をつくしたものであったらしい。したがって、チャイティヤーとよばれるこの石窟は、礼拝のためのものであったから、このチャイティヤーの近くには、ビハーラーと呼ばれる多くの僧院が設けられている。

しかし、今はこの窟院に刻されているという碑銘のことに関して考究を進めようというのであって、このようなことに言及するのが目的ではない。④

静谷目録の五二〇番目⑤にはこう書かれている。

王はMāmālaにいる高官Parigutaに次の命令を与える。われわれはこのValurakaの窟に止住する「大衆部の出家比丘の支持のために」Māmāla-āhāra の北部の Karajaka 村の寄進比丘田は彼らに施与された。われわれはこの Karajaka 村に対し、比丘田として（それにふさわしい、諸税と官吏の介入との）免除を認め（あらゆる種類の）免除を賦与する。これらの免除により、われわれはそれを（収税官の介入から）免除する。この Karajaka 村の比丘田の免除に関しては、口頭の命令を受領した……によって証書が起草され、一通の認可状が、（王により）勝利に輝く王の幕営において下附された。十四（？）年、雨期の第四半月一日、（証書が）Sivakhadaguta によって作製された。

そして、この文章の末尾の「十四（？）年、雨期の第四半月一日、証書が作製された」と記された年代について、この十四年とは何の十四年であるのかが、解読されれば、この碑文の作製年代はもちろんのこと、Kārli 窟院の創設年代も明白になるのであろうが、残念ながらその点は明白ではないらしい。普通、年代を示す場合は、何々王の何年という表現をするのであるが、この碑文にはこの王名が欠如しているのであるが、これら碑文の解読に功績のある Lüiders は、この年代について、十八年であろうとしながら、更に、Gotmiputa Sādakaṇi の治世であろう、としている。

Gotamiputa Sādakaṇi 王は、西南インドに栄えたアーンドラ王朝の王様の名前であるが、それらの王の十四年乃至十八年というところから、この王名が刻されたのは、紀元一〇六年から一三〇年の間のことではなかろうかという推定がなされて来ているわけであろう。

更に静谷目録の五二一には、⑥次のように記されている。

成然あれ！Vāsiṭhiputa Siri-puḷumāvi 王の二十四年、冬の第三半月二日、Setapharaṇa の子で、Abulāmā に住む Sovasaka の Haraphasaṇa 優婆塞が、この九ケの僧房をもつ会堂を、大衆部の所領として四方僧伽に対して寄進した。両親への供養、一切衆生の利益安楽の確立のために。三一年、私と Budharakhita と、Budharakhita の母 Mātarakhita 優婆夷とによる寄進として、第二の通路が完成された。

これについて、静谷博士は、Harapharaṇa の名前と、Abulāmā の地名はインド的ではなく、ペルシャ系のものではないかと言及しておられるが、注意をしなければならないことであろう。そして、この碑銘には王名と年代が明記せられておるので、これらによってみても、この窟院の年代を推測することが出来るであろう。⑦

一方、観点をかえてこの Kārli の窟院を見ると、インドの生んだ学者コーサンビーは次のように述べている。⑧

デカン西部のカールレの僧院は大衆部に属したが、どの部派の仏教僧侶にも開放された。その遺跡では、チャイトヤの天井のかって彩色されていた梁を除いて、あらゆる金属品や木工品が消滅し、柱や壁に描かれた絵画も消えてしまった。ヴェーサーリーの改革によって、金銭に関心をもった乞食者がマガダにあった国家の抑制や慣習にわずらわされない南の方に行ったのであろうが、放射性炭素の測定によれば、カールレの寺院はアショーカより前の時期に建立されていた。そこにある馬や象に乗り流行の先端の服装をした金持の端麗な夫婦像は、美しくしかも肉感的である。これが僧侶たちの集会所にあるとはだれもほとんど思えないであろうが、これこそ富裕な商人が好んだものであろう。その彫刻家は、遠いところからとくに連れて来てかなりの費用で傭ったに違いない。

Kārli 窟院がアショカ王より前の時代に建立されていたかどうかは、議論のあるところであろうが、⑨ここで注目をしたいのは、Kārli 窟院には仏教窟院に不似合な肉感的な像が彫刻せられており、彫刻家は遠いところから連れて来

られたのだろう、という件であろう。

Kārli 窟院の入口前座の側壁には男女一対づつの供養者の像があるというが、それは腰に細い布を巻きつけただけの男女が、互に肩に腕をのせあって並んで立っているものであるが、特に人目を引くのは、その婦人の胸と腰のふくらみのボリューム豊かな姿であろう。

男女一対の姿はそれから更に進んで、男女の肉体的結合あるいは性的結合を示すものとして、ミトウナ像として呼ばれて来ている。静谷目録の五一六[10]には

制多窟ベランダの右隅の一対の人物の上にBhadaoama比丘寄進のmithūna

と書かれている。豊満な姿態のこの婦人と男性の一対の像に刻されているものと思われるが、仏教窟院の中にもこのようなミトウナ像が用いられて来ているのは何故なのだろうか。

仏教は本来、釈尊の冥想に出発し、肉体的欲求を抑制して、精神性の昂揚をはかることを主としていると考えられているが、その限りにおいて、ミトウナ像は仏教的なものではあり得ないだろう。それに反して肉体的な力を求め苛定しようとするのはヒンズー教のあり方であった。カジュラーホに示されるミトウナ像の群像、性の讃美の塔は仏教とちがったヒンズー教のあり方を極端にまで示すものであったといえよう。しかし、そのようなミトウナ像が大衆部の窟院とさえいわれるKārliにも見出されるのは何故なのだろう。

「女性は梵行の垢である」といわれ、「カビ」であるといわれ、更に仏教僧団に女性の出家が認められたことで、一千年伝えられるといわれた正法が五百年しか伝わらなくなってしまった、とさえいわれてさげすまれた女性が、しかもミトウナ像としてあらわされて来たところには、インド土着のヒンズーの底力の強さを感ぜずにはいられないよ

うに思われる。

このことは、BC二世紀中葉に造られたというバールフットの欄楯に見られる、豊満な胸をあらわにしたヤクシー像、BC一世紀初期の造立になるというボドガヤーの欄楯に見られる官能的姿態のヤクシー像、更にBC一世紀のサンチーの大塔の塔門にある全身ヌードの女体の美しさを強調したと思われるヤクシー像、等々が、すでにあり、Kārlīのミトウナ像が仏教寺院として最初のものではないのだが、それにしてもミトウナ像として、将来のヒンズーのミトウナ像全盛への包芽でもあるように思われ、そこに当時のインドの人たちの持っていた人間性への讃歌の心の強さを感ぜずにはいられないように思われる。

そういえば、仏教々団によってさげすまれて来た女性が、法華経の中においては、摩訶波闍波提と耶輸陀羅の授記として、他の男の弟子たちに授記を授けた時に、彼女等にも全く同一に授記をしたのだというところがある。女は仏になれないと頑くなにいわれて来た仏教・経典の歴史の中において、舎利弗・目連等の男の仏弟子と女の仏弟子とが全く同様にとり扱かわれたというのは、劃期的な出来ごとであるといえよう。このことは大乗といわれる仏教経典においては、全く男女が同一であることを示そうとしたものであろうが、このような考えがヒンズーの持つ考えと結び合うことによって、ミトウナ像を採用するのに至ったものなのかもしれない。それとも、インドでは、宗教的なものの中に、宗教の否定する人間本来の性的欲求を、端的に具象化したものを並べ表わすことに、何等の矛盾も感じなかったようである、[11]ということによるのだろうか。

一方コーサンビーは彫刻家は遠いところから連れて来られた、といっているが遠いところとは何処なのだろうか。Kārlī窟院の碑銘は三十五を数えるが、それらの銘文をしらべてみると外国人が出て来ることに気がつく。即ちそ

れは次のようである。

四九五、Dheṇukākaṭa から来たギリシャ人の Sihadhaya の柱の寄進。

四九八、Dheṇukākaṭa から来たギリシャ人の Dhamma の寄進。

五〇〇、Umehanākaṭa からきたギリシャ人 Viṭasaṁgata の柱の寄進。

五〇三、Dheṇukākaṭa からきたギリシャ人 Dhamadhaya の柱の寄進。

五〇五、Dheṇukākaṭa からきたギリシャ人 Culayakha の柱の寄進。

五〇六、Dheṇukākṭa からきたギリシャ人 Sihadhaya の柱の寄進。

五〇九、Dheṇukākṭa からきたギリシャ人 Yasavadhaṇa の柱の寄進。

以上七種の銘文において、ギリシャ人の名前を見ることが出来るのであるが、これは、西インドの地が外国との交流をもっていたことを示すものであろう。しかもこのギリシャ人たちが来たという Dheṇukākaṭa から来た人たちでギリシャ人といわれない人たちによる寄進の数々は、更にこの外に九種を数えることが出来る。このことは Dheṇukākaṭa からこの地に来た人々の手が、窟院の開設に大きな力を及ぼしたものであることを示していよう。

Dheṇukākaṭa の地が何処であるのか、カニンガムはクリシュナ上下流の Dhānyakaṭaka ではないのかと推定をしているが、残念なことには確定をされるまでにはいたっていないので、未だに不明であるといわなければならない。しかし、プーナの町の北方七〇キロほどの町 Junnar にある窟院からも、ギリシャ人の寄進による水槽、食堂、玄関の寄進があることの報告がなされているので、この地にはギリシャ人たちの移住がかなりな数に上っていたことは知ることが出来る。

更に静谷目録五〇二には、Dhenukākaṭa から来た商人の聚落が柱を寄進したことを記し、五〇八には商人のGolaの子が柱を寄進したことを録している。商人がおり、商人の聚落があり、しかもギリシャ人がいたとするならば、このあたりでは貿易・通商が行なわれていたものと考えることが出来るであろう。

南インドとローマ帝国との海上貿易がさかんに行なわれたのは、AD一世紀だというが、貿易・通商によって、このあたりにも沢山な外国人の移入があり、富裕な経済力をもった商人たちをも輩出して来たことであろう。そして、Kārli の碑銘は一世紀の後半からといわれているので、窟院に着手されだしたのも、この頃のことであったろう。

外国人との接触は、当然どこかに影響があらわれて来るものだと思われるが、性欲を極端に抑制しようとして来た仏教々団にとって、ミトウナ像が正面に飾られるに至るのには、外国人の思惟方法も何らの影響もなかった、といい切ることも出来ないように思われる。

このような新らしいものとの接触は、古い型にいつまでも固執することを困難とするであろう。碑銘の中に、「大衆部のために」と書かれたもの二ケ処を見出すことが出来るこのKārli 窟院は、すべてのものにむかって門戸を開く動きを持つが故に、外国人の寄進をも得るに至ったのではなかろうか。その最大なものは、より沢山な人々のためのものとしての大乗仏教の包芽が、そこにあったからなのではなかろうか。

しかし、この地の大衆部がどのような経典を拠り所としたのか、生み出したのかは解ってはいないし、その手がかりも今のところないようである。

⑤

Kausambi（Kosam）から発見せられた八種類の碑銘のうち、一碑銘に「大衆部」という言葉を見出すことが出

来る。これは仏の座像の台座に書かれていたものであるが、その前にKausambiという地名の所在を確めておく必要があるだろう。

Kausambiは、Varanasiの西、ガンジス川をさかのぼり、Allahabadの少々西、Yamuna河のほとりにあるが、KausambiとはKosam憍賞弥であるといわれている。この国は古代インドの十六大国の一つに数えられ、六大都市の一つにも挙げられていたので、かなりな繁栄をいたしていたところであろうと思われる。

この国のことについては玄奘三蔵の西域記に詳しいので、今はそれによることにする。

憍賞弥国は周囲六千余里。国の大都城は周囲三十余里。土地は肥沃で、地利は豊か。気候は暑熱で、風俗は剛勇。よく勉強し、福徳善集を行うことを心懸け、伽藍は十余ケ所あるが、崩れ倒れ荒廃している。僧徒は三百余人、小乗の教えを学んでいる。天祠は五十余ケ所、外道の人々は甚だ多い。⑫

玄奘三蔵は唐の太宗の貞観三年（六二九）八月に長安を出発し、十九年（六四五）正月に長安に帰っているが、この間実に十六年余に及んでいる。したがって玄奘三蔵がインドに入った時は、漸くインドにおける仏教が衰退を来しはじめている時であったので、昔日の遺跡は荒廃したものもあるわけだが、「傾頓荒蕪」の字句はそれを如実に物語っていることになる。

しかし、この地にはかって、瞿師羅長者がおり、釈尊に帰依し、園林を献上し、寺院を建て、釈尊もここに住したといわれているので、釈尊の足跡の及んだ全く聖地の一つであった。それだけに、この国については幾つかの物語が伝えられている。その中の一つにこういうものがある。

釈尊が拘賞弥に住しておられた時、一人の比丘が戒を犯した。多くの比丘たちは、あの比丘は戒を犯したとしてこ

れを非難したが、するとその比丘は私は戒を犯したのではないと主張し、更に他の比丘らに語らいその支援をうけて、多くの人々の同意を求めた。これによって拘賞弥の比丘僧団は二つの派に分裂をしてしまった。

このことが釈尊に報告せられると、釈尊は斗諍して相罵詈し、誹謗して、他の人の長短を何求してはいけない。汝等は共に斉しく集まり、水と乳の合するように一つになって、仏法を利益し安楽に住しなければならないからだ、と教えられ、更に過去世の伽奢王梵施と拘薩羅王長生とその子長との物語りを語って聞かせ、怨みを以て怨みを除けば怨みはやむことはないが、無怨ならば怨みは自から除かれるのである、と訓されたのだった。

しかし、二派に分れた比丘たちは、心が過熱してしまっていたのだろうか、諍いをやめようとはしなかった。そこで釈尊は誰にも告げないで、自ら臥具をもって、拘賞弥国を出て舎衛国に帰ってしまわれた。

釈尊がいなくなってしまわれたと知った拘賞弥国の人々は、原因が比丘たちの諍にあることを知って、これからはこの国の比丘らを見ても起って迎えず、恭敬礼拝もせず、教えも聞かず、供養をしないようになってしまった。

比丘たちは困ってしまったのだろう。釈尊のみもとに行って謝罪し、斗諍事を滅しなければ、と舎衛国に行って、比丘たちは和合をした。[13]

この諍は持律者と誦法者との諍いであるともいわれるが、仏典結集に関する Rājagṛha 結集、Vaiśārī 結集、北伝の Pāṭaliputra 結集の伝説が、その背景に持律者と持法者の抗争を想定せしめたものと一連の関係があるものとして注目に価する、[14] とさえいわれている。Kausambi 国において僧団が二つに分裂するような危機が生じたというのは、将来の上座・大衆の二派発生の包芽のようなものがあったのだろうか。

しかし、Vaiśārī 結集は、長老耶舎が、そのVajji 族出身の比丘たちが十事を提唱したことにはじまり、他で金銭

の布施が行なわれていることを知り、これを非難したことに端を発し、遂にVajji族の比丘たちから非沙門であると非難せられた耶舎は、VaiśālīをのがれてKausambīに来って、そこから各地に使者を送って助力を求め、それらによってVaiśālīで結集が行なわれた、そしてその結果、教団は二つに分裂をしてしまった、とされている。

このVajji族は進歩派であったといわれるが、その限りでは、大衆部の包芽はVaiśālīに発したものであったのだろう。逆にKausambīはVajji族に反対した耶舎が使者を送った拠点でもあった。このようなKausambīについて、二つの物語がなされ、同時に後世、玄奘によって、小乗の教えを学ぶとさえいわれたこの地点から大衆部のためにと書かれた刻文が発見せられたというのは、どうした事情によるものなのだろうか。

考えられることは、Kausambīは西南へはUjjeniを経てBharukaechaへのルートに当り、SāxciやBhārhnt の聖地の存在は、早くからこの方面へ仏教が浸透したことを示す。西へはYamunāによってMathurāに通じ、北はKosala 東は、Rājagaha への経路があり、重要な交易の中心地であった。[15] という事柄のうち、Mathurā に通じているということ、そのMathurā が第三の仏教中心地として浮び上って来たということ等にあるのではなかろうか。

Kausambīから発見されている碑銘は八種類だが、その内容は仏足跡を刻した石板が一種、菩薩像が二種、仏像が二種、石柱・灯明皿・印章が各一種づつとなっている。

仏像彫刻の歴史によると、仏の姿を直に表現することは釈尊の威容をそこなうものであるとして、菩提樹や仏足跡や法座などを刻して、そこに釈尊がおいでになることを暗に示そうとしたものだった。それが時代が下って、ギリシャ文明との交流の結果、GandhāraやMathūraで仏像彫刻が行なわれるようになって来たとは、定説になってきている。

これによる限り、Kausambī から仏の足跡が発見されたということは、かなり古い時代から仏教活動が行なわれていたことを語るものであり、四種類もの仏菩薩像が発見されたことは、Mathūra との交渉の並々ならなかったことを示してはいないだろうか。これについて Kausambī 出土の菩薩像の台座には次のように書かれている。

「大王 Kaniṣka の二年、冬方二月八日に、三蔵に通暁せる Buddhamitrā 比丘尼が、世尊・仏陀の経行処に菩薩の像を造立したことを録する」⑯

大王 Kaniṣka とは有名なカニシカ王のことであるが、カニシカ王の出身地はチベットの伝承によるとコータン国の出身だといわれるが、明白ではないらしい。しかし、王は都をタキシラのペシャワルにおき、北インドを中心に広大な王国を建設したことは広く知られている。この王国の中には種々な民俗がおったが、加えてギリシャ・ローマや中国の文明が入っても来たので、それらがインドの文化と融合して、ガンダーラ文明とよばれる特種な文化を作り出して来た。⑰ギリシャ風の波うつ頭髪、エンゼルを持った飾り物、通肩とよばれる衣服をまとった仏像の彫刻などは、カニシカによるクシァーナ王国の特異な文化の華であった。しかし、このカニシカ王の年代には異説が多く、王の即位をAD七十八年におくものもあるが、最近の考古学の成果による研究では、即位を一四〇年と一五二年の間とするもの、在位期間を一二八年から一五一年とするもの、一二九年から一五二年とするものなどであるが、それらによってみても、AD二世紀の前年に活躍したとすることになるだろう。

それらによってみるとこの菩薩像は二世紀の初めに製作されたことになるが、それはまた Mathūra の仏像彫刻がはなやかになった時期でもあった。⑱

更に、静谷目録の五三〇と五三一との銘文によると、この二つの菩薩像はともに、Buddhamitrā 比丘尼の寄進に

なることが記されている。この比丘尼の名前はこの外に Mathūra 出土になる菩薩像の台座の碑銘の中にも見られる。このことは一人の比丘尼が Mathūra と Kausambi の両地に往き来があったことを示すであろうが、それだけにこの両地の交流は密接だったことを示すものかと思われる。

静谷目録五三二によると、

Bhadramagha王の八三年にこの仏像が造立されたことを録し、この僧院が大衆部の占住する所であったことを証明しているという。なお同様の仏像がもう一つあり、それにも同じ銘文が刻されているらしい。[19]

とある。仏像の彫刻がさかんであった Mathūra からは、大衆部のためにというように書かれた仏像（菩薩像）は三種にのぼり、その他柱頭、台座等の四種から、大衆部のためにといった刻文を見出すことが出来る。これについて高田修氏は次のように述べている。

仏像の出現した時期の前後には、すでに主な部派が対立していたことは疑いない。その当時マトウラーで大乗仏教がおこなわれたという形跡は全然見当らず[20]

しかし、マトウラーの碑銘に見える部派名の研究によって、

以上の年代的な区分からすると、大衆部はわれわれのいうクシャーン時代の全期を通じて、マトウラー地方で教線を張っていたのに対し、有部は早期にのみ勢力があったとみなすことが出来ようか。[21]

とのべている。即ち部派発生当時には大乗系のものを見出すことが出来ないが、クシャーン朝になると、Mathūra では大衆部の活躍がしきりであったということになろう。

これらのことから考えて、Kausambi 出土になる大衆部のためにとされた菩薩像等々は、Mathūra の仏教運動に

関連あるものだと考えることは出来ないであろうか。これが可能であるとするならば、Mathūra と Kārbi はそれぞれ大乗仏教興起の一つのポイントであったように考えられて来る。

① 棲神31号　P38以後
② 大正VOL9、P九上、P71
③ 芸術新潮二四五号P80　田枝幹宏・アジャンタ再見
④ 上野照夫・インドの美術P91ではカールラー窟院は一世紀であるというが、高田修・仏教美術史論考P97では、二世紀初期であるという。更に、コーサンビー・インド古代史P281では、アショーカより前の時期の創立だ、という。
⑤ 静谷正雄・インド仏教碑銘目録　P40～41
⑥ 〃　P41
⑦ この二つの碑銘について、静谷目録五二〇の碑銘の王はGautamiputra śātakarni か Vāsiṣṭhiputra Puḷumāvi 王の何れかであろうとしているが、もし後者であれば、五二〇と五二一の碑銘の間にはほんの数年のへだたりしかないことになる。
⑧ コーサンビー著、山崎利男訳、インド古代史　P280～281
⑨ アミョカ王はBC三世紀の人で、カールリーの窟院の彫刻はAD一世紀といわれている。その前には三〇〇年からそれ以上の差があるので、カールリーの原型があったとするのもかなり困難かと思われるが。
⑩ 静谷正雄・インド仏教碑銘目録　P40
⑪ 高田修・仏教美術史論考　P209
⑫ 大正VOL51、P898a
⑬ 大正VOL22P879b～885a等
⑭ 塚本啓祥・初期仏教々団史の研究　P269
⑮ 〃　P381～5
⑯ 静谷正雄・インド仏教碑銘目録　P43
⑰ 平川彰・初期大乗仏教の研究　P96～97
⑱ 高田修・仏像の起源、マトウラー仏の出現　P203以後
⑲ 静谷正雄・インド仏教碑銘目録　P42
⑳ 高田修・前掲書　P394
㉑ 〃　P396